

探究のポイント

第12回

このコーナーでは、「総合的な探究の時間」や各教科で「探究」を実践する上でのポイントを、高校事例等から見ていく。今回は、「4つの力」を育成するカリキュラムを作り、探究活動の指導方法を『平野メソッド』として体系化して学校全体で取り組む、大阪教育大学附属高等学校平野校舎を2号にわたって紹介する。

大阪教育大学附属
高等学校平野校舎の
「探究のポイント」

- ◆自校で育成したい「4つの力」をPROG-Hと対応づけ、カリキュラムの成果を検証
- ◆探究学習に必要な指導ツールをまとめた冊子を使い、探究学習の指導を平準化
- ◆“学び方を学ぶ”授業を第1学年に展開することで、探究学習への意欲を高める

自校で重点的に育成する能力を「4つの力」にまとめ客観的な数値で生徒の成長を確認

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

グローバル人材に必要な要素を「4つの力」として集約・整理

大阪教育大学附属高等学校平野校舎（以下、平野校舎）は2015年度からSGH（スーパー・グローバル・ハイスクール）に採択され、探究学習として3年間の体系的な「課題研究」を実践してきた。SGH事業は2018年度に終了し、2019年度からその後継事業として「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」が開始されたが、平野校舎は2020年度からWWL拠点校にも採択されている。

SGHでは「多面的に“いのち”を考えるグローバルリーダーの育成」をテーマに掲げた。しかし、それを具体的な教育実践につなげるには、グローバルリーダー、もう少し裾野を広げるならばグローバル人材の定義を明確にする必要があった。

「そのためには、コンピテンシー論が必要だと教員全員が認識していました。つまり、グローバルに活躍している人が持っている能力を整理すること

ができれば、その能力の育成をめざしたカリキュラムの展開が一つの指針になると考えました。そこでPROGテストの結果や生徒対象アンケートの結果、教員が日頃の教育活動で感じとっている本校生徒のさまざまな資質・能力などを

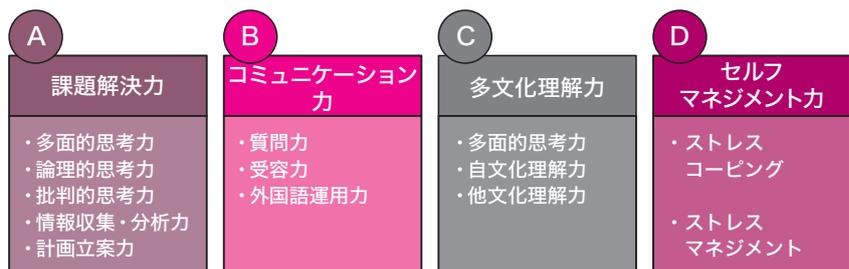
もとに教員全員で議論しました。その結果、紡ぎ出されたのが『4つの力』（コンピテンシー）<図1>でした」とWWL推進委員長で主幹教諭の松田雅彦先生は振り返る。

こうして、グローバル人材の育成を学校全体のミッションに掲げ、「課題研究」の目的をグローバル人材に必



松田雅彦 主幹教諭

<図1>平野校舎で重点的に育成する「4つの力」（コンピテンシー）



※「個人として習得すべき力」と「他者との関係により身につく活用・探究力」で構成

要な「4つの力」の習得と明確に打ち出し、スタートを切ることができた。

「4つの力」とは「課題解決力」「コミュニケーション力」「多文化理解力」「セルフマネジメント力」だが、それでもまだ抽象的であることから、さらに一つ一つの力を分析し、「課題研究」だけでなく「教科」の学習においてもめざすことができる具体的ないくつかの力をあげること、さらに教員間のコンセンサスを得た。

「平野メソッド」を確立し それを基に2段階で学習

SGHは、第1学年、第2学年で「課題研究」をそれぞれ2単位設定し、第1学年では地元大阪や日本の社会課題に関するテーマについて、第2学年では東南アジアなど海外に視点を広げたテーマについて、それぞれ探究に取り組んだ。また、第3学年では、第1・2学年での研究成果を一人ひとりが論文にまとめた。

当時は課題研究の指導経験をもつ教員が少なかったため、指導方法や指導ツールなどを探りながら進めた。こうして蓄積された指導実践はやがて「平野メソッド」<図2>として確立され、2019年3月に教員が用いる指導用冊子にまとめられた^(注)。

WWLに採択された2020年度以降の課題研究は、「グローバル探究」に名称を変えた。ミッションや目的に大きな変化はないが、最初に探究の進め方を学んだ方がスムーズな活動につながると考え、第1学年では、「平野メソッド」をベースに、探究活動に関する「学び方を学ぶ」授業を実施し(1単位)、第2学年では、第1学年での学習を踏まえてグローバルな課題について探究することとした(2単位)。

WWL1年目の授業実践で見つかった課題に対して、2年目にいくつかの改善を加えた。

「たとえば、テーマ設定や考察においてデータの活用や先行研究などの文献調査が足りない研究がありました。そこで、ファクトベースで論理的に考えてもらうため、第1学年で学校設定科目として実施している『データサイエンス基礎』との連携を進め、データによる考察に関する学習を充実させました。3年目は、さらに、データや先行研究の調査内容を互いに発表し合うなどの工夫を加えることにしています。また、2年目以降、第2学年で

実施する学校設定科目『イノベティブシンキング』においても、探究における論理展開力とは別に、課題そのものへの発想力を鍛える内容を組み入れて実施しました」

チームワークの意味を実感でき 進路意識にも影響する課題研究

「グローバル探究」の具体的な内容は以下の通りだ。第1学年の「グローバル探究Ⅰ」では、探究活動の流れに沿って学び方を学んでいる。探究活動には、チームをつくり、合意形成を行いながら、論理的に探究を進めて、ポスターや論文として発表するという流れがある。「平野メソッド」にはそうした流れの各場面で必要な力を育むツール(たとえばKJ法、ロジックツリー、マンダラート、論理ピラミッド、NASAゲームなど)が満載されており、指導する教員は適宜それらのツールを使って、1年間かけて探究の“方法”を教えている。

一方で、SDGsに関する身近な話題についても、チームごとに探究活動を行う。SGHでは「格差・貧困」「健康・医療」「防災・減災」などを主なテーマとしていたが、現在もそれらを踏襲しながらテーマ設定を行っている。

第2学年の「グローバル探究Ⅱ」になると、第1学年で学んだ探究の“方法”にしたがって、グローバルな社会課題について探究活動を実施している。

「本校の探究活動では、チームでの活動を特に重視しています。1チームは4人を目安に、3人以上で構成します。“チーム”と“グループ”の違いは、目的・目標の有無です。仲よしグループが存在するように、“グループ”は目的を持たないために人間関係が優先されて閉鎖的になりがちですが、“チーム”は目的を持つため異なります。目的遂行のために、自分ができることを考え、提案し、協働していく中で、チームワークの大切さや協働性を学んでほしいと考えています」

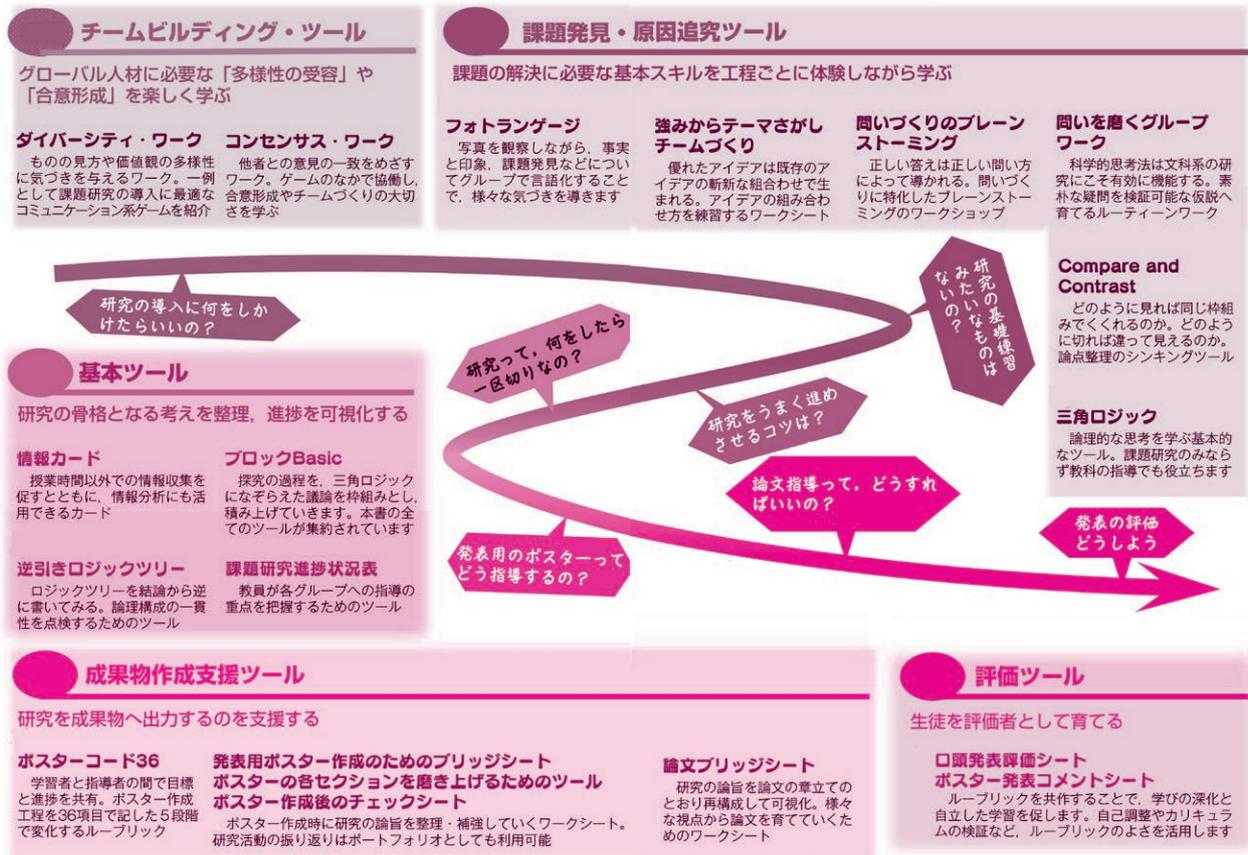
第3学年の「グローバル探究Ⅲ」はまだスタートしていないが、2年間の探究活動の成果を一人ひとりが研究報告の形でまとめ、将来の学びにつなげる活動を行う計画だ。

「探究活動は、進路決定にも大きな影響を及ぼしています。また、学校推薦型選抜や総合型選抜などでの進学を考える生徒が増えています。たとえばSGH1期生が卒業するときの学校推薦型・総合型選抜での入学者は7人に

(注) 課題研究の指導方法をまとめた『平野メソッド』については、次号、Guideline7・8月号の『探究のポイント』で詳しくご紹介する予定です。



<図2>『平野メソッド』の全体構成図



(<http://hirano-h.cc.osaka-kyoiku.ac.jp/method2>)

1人でしたが、毎年増加し、2021年度は4人に1人でした。課題研究に取り組む中で、解が見つかりにくい課題に他者と粘り強く協働しながら取り組んだ経験を通して、自分たちの研究について自信を持って説明できるようになったり、将来取り組みたい研究分野が明確になったりする生徒が増えました。課題研究は、その意味では、キャリアデザインにも通じる教育活動だと思っています」

グローバル探究の一部を部活動にして 海外の高校生との交流を推進

SGHとWWLの最大の違いは、学校間でネットワークを作って学び合いを行うことにある。2021年度はWWLの一環として高校生国際会議をオンラインで開催した。ただ、1学年120名の生徒全員で企画することは難しく、興味関心の高い希望者を中心にして、企画・運営を進めることになった。

それが「グローバル探究プラス」と呼ばれる取り組みだ。部活動のような形態をとり、週2回、有志で放課後に集まり、グローバル課題について議論したり、英語のスキルを高めたりする活動を展開している。そこには海外アドバイザーも参画し指導助言を行っている。2022年1月後半に国

際会議を開催したが、「グローバル探究プラス」の生徒が英語で司会を行い、見事に会議を運営することができた。

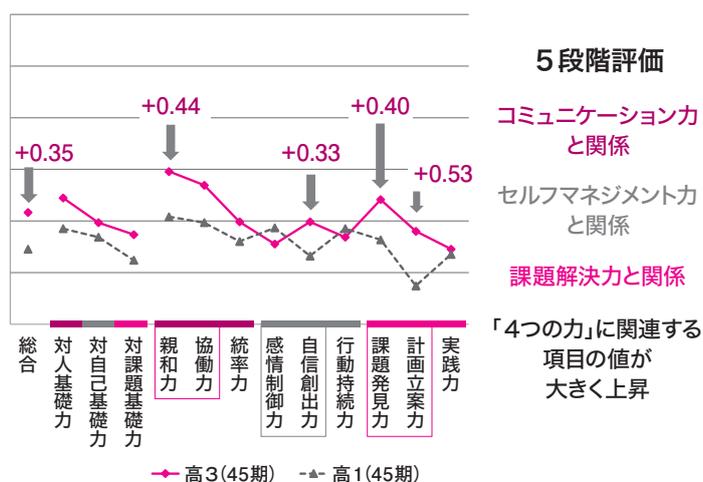
WWL拠点校の活動には、「グローバル探究」や独自設定科目に加えて、複数の海外研修も含まれている。計画では第1・2学年の希望者を対象に「カンボジアフィールドワーク」と「ニュージーランド研修」が用意され、第2学年は全員が「タイ研修」に参加することになっていた。ところが2年続きのコロナ禍で、カンボジアフィールドワークとニュージーランド研修はオンラインで行い、タイ研修は国内での研修に変更されている。

「特に全員参加のタイ研修は、現地で活動するNPOやNGOの協力も仰ぎながら、さまざまなフィールドワークを行う本校独自のプログラムを開発しているため、生徒への教育効果は非常に高いものがありました。『4つの力』のうちのセルフマネジメント力を鍛える上でも、多文化理解力を獲得する上でも有効だった行事ができなことは、残念でなりません」

客観的な指標を使うことで 生徒の成長を正確に評価

探究学習がどのように生徒の成長を促しているのかを

<図3>PROG-Hで見る、平野校舎の「4つの能力」の伸び



正確に把握するのは難しい。だが、平野校舎では、育成したい力として、コンピテンシーベースの「4つの力」を掲げ、「学びみらいPASS」のPROG-Hで測定できる力と対応づけたことで、変化を可視化することができるようになった。

例としてSGH指定2年目に入学した学年について、第1学年と第3学年でのPROG-Hの結果を比較すると、「4つの力」の「コミュニケーション力」に關係する親和力や協働力、「セルフマネジメント力」に關係する感情制御力や自信創出力、「課題解決力」に關係する課題発見力や計画立案力などが、いずれも向上していることがわかる<図3>。

「これらの数値は、高校全体と比べるとかなり高く、特に課題発見力や計画立案力、親和力は大きく伸びています。教員の感覚ではなく、数値できちんと把握することでカリキュラムの有効性が確認できますし、同時に教員がしっかりとプログラムの趣旨を踏まえて指導している証にもなっています」

平野校舎では毎年度、職員室に自分たちの学年が行った取り組みを一覧表にして書き込むWWLカレンダー（かつてはSGHカレンダー）を作っており、それを次の学年団に共有している。全教員が全学年の取り組みを熟知した上で、各学年団が当該学年の生徒にあった指導が展開できるよう改善を加えている。こうした細かい工夫の成果が数値にあらわれているともいえる。

グローバル探究での取り組みを 教科学習に応用する試みも

今後の抱負として、松田主幹教諭は、「グローバル探究」で学んだ探究の方法を教科学習にも応用して、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を高めるような教科の授業への展開をあげる。

たとえば、松田主幹教諭が担当する保健体育では、「課題解決学習としての体育授業」を謳い、23時間あるサッカーの授業のうち4時間は座学にしている。最初に試合を行い上手くいかなかった原因をKJ法で明らかにし、個人の課題とチームの課題を整理して優先順位の高い方から3つ選び、さらにロジックツリーを使って原因分析を行うことで、課題解決のための練習方法を考えて

いく授業構成にしているという。

公民の授業では、企業が設定しているような生理休暇を高校でも認めてほしいとする請願書を生徒たちが作成した。その請願書をまとめるにあたって、マンダラートやロジックツリー、論理ピラミッドなど「平野メソッド」の手法を駆使して論理を展開させている。

物理の授業でも、教員の発問に代えて、問いづくりのツールで生徒が問いを作り、NASAゲームの手法を使って重要だと思われる問いをチームで選び、答えを各自で探す。自分たちが発した問いなので、学びが主体的になり、問うことを繰り返すうちに本質的な問いに近づくという。

「何か問題があると、すぐに集まってミーティングを行うなど、探究活動を通して習得したコンピテンシーは、教科の学習だけでなく、部活動を含め生徒のあらゆる活動に反映されています。教員が教える教育から、生徒が自分で学ぶ学習へと脱却させる上でも、『平野メソッド』に基づいた課題研究のプログラムは非常に有効で、将来的には、生徒の自学自習をベースに授業を組み立てていくような学校の姿も思い描いています」

大阪教育大学附属高等学校平野校舎

◇所在地：大阪市平野区流町2-1-24

◇創立：1972（昭和47）年

◇卒業生数：2021年3月卒業生115名

◇卒業生の進路：国公立大32名／文部科学省所管外大3校1名／私立大46名／専門学校2名／その他34名